

かつまた 勝間田氏一族

勝間田(勝田)氏は、牧之原市勝間田川流域(勝間田荘)を治めた在地領主として、平安時代末期保元の乱(1156年)史料に初めて登場します。同族と考えられる横地氏と共に鎌倉時代には御家人、室町時代には奉公衆として活躍しました。しかし、応仁の乱以降、駿河守護の今川氏と対立し、文明8(1476)年に今川義忠の攻撃で本拠である勝間田城が落城します。離散した勝間田氏一族は、現在の御殿場市印野などに移り住み、各地区の発展に尽力しました。一族には鎌倉時代後期、歌人として名を成し「夫木和歌抄(全36巻17,350余首)」を編纂した勝間田(藤原)長清などがいます。

伝説では相良維頼の娘の子が横地太郎家長で、その長男頼兼が横地を継ぎ、次男が勝間田氏を興したといわれています。



牧之原台地周辺の中世豪族

勝間田城の構造

勝間田城は、勝間田氏が15世紀中頃に築城したと考えられる戦国時代以前の原型を残した貴重な山城です(1983年2月25日県指定史跡文化財)。牧之原台地に連なる尾根標高100~130m程、勝間田川最上流部に位置します。その規模は東西200m・南北310m、総面積12,695㎡を測ります。

1985年度から数次にわたる発掘調査により、多くの遺構(建物跡・井戸・堀)や遺物(土器・木簡・古銭等)が検出され、築城過程、建物の配置、城内生活の実態を知ることができます。木簡に書かれた文章からは、笠原を姓とする武将の存在や、池田衆と呼ばれる土着の兵力まで城内に在城していたこと、杵や竹を調達して食料や武器・建物に利用していたことなどが推測できます。

本曲輪を中心に狭小である南区域に対し、幅10m程の大堀切を挟む北区域二・三の曲輪は、一区画が広く外縁部に土塁を巡らしています。南区域より後代改修の可能性が考えられます。

東方を向いて配置された堀・土塁・曲輪は今川氏に対する備えといえるでしょう。

勝間田氏の里

勝間田氏ゆかりの地として、勝間田川流域には現在も勝俣、勝間、勝田などの地名が残っています。中流域に小仁田薬師堂・長興寺・中村(穴ヶ谷)城、下流域・河口部には龍眼山砦・清浄寺、石雲院(坂口谷川上流)が所在します。

勝間田氏一族の墓所とされる石塔群(市指定文化財)がある清浄寺は、時宗の道場として弘安6(1283)年頃開基と伝わっています。石塔には南北朝期に建てられた時宗の法名を刻むものがあります。龍眼山砦南曲輪は榛原公園として整備され、土塁・堀切を見ることができます。墓所山腹・砦からは、勝間田氏の海運拠点川崎湊跡・海路とした駿河湾を眺めることができます。

勝間田氏とその武士団の居館位置はまだつかめていません。皆さんも、勝間田川流域と周辺に残る勝間田氏の足跡から、その動向を探索してみてください。



勝間田氏のご子孫も集う城趾祭



勝間田小学校侍ソラン



勝間田氏一族の墓(清浄寺)